824
52
2

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2

ガラス使用

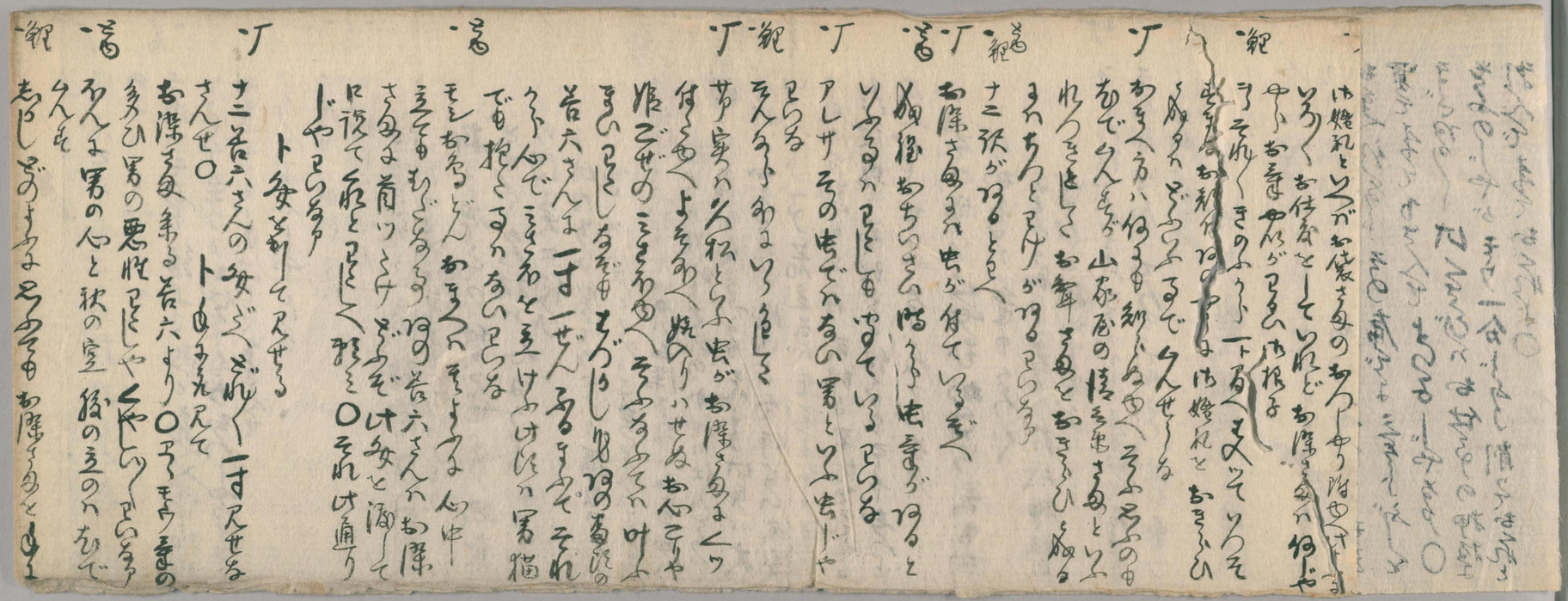
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

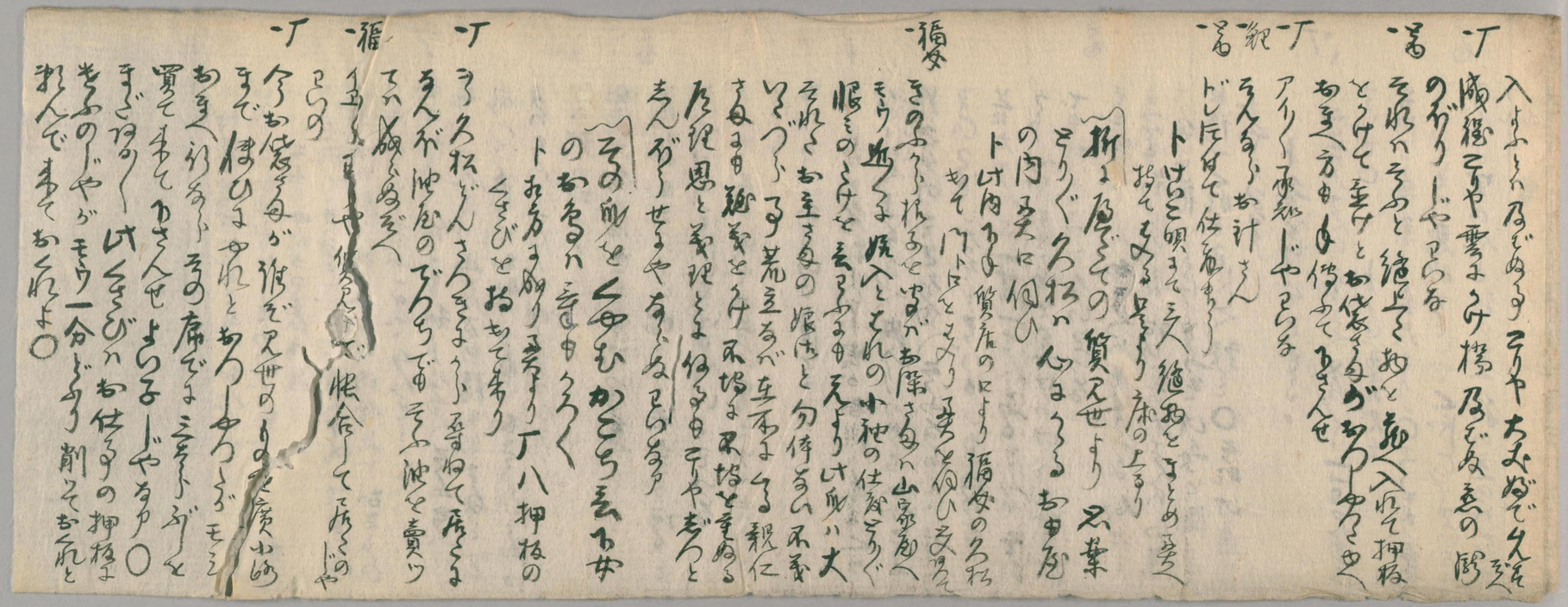
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

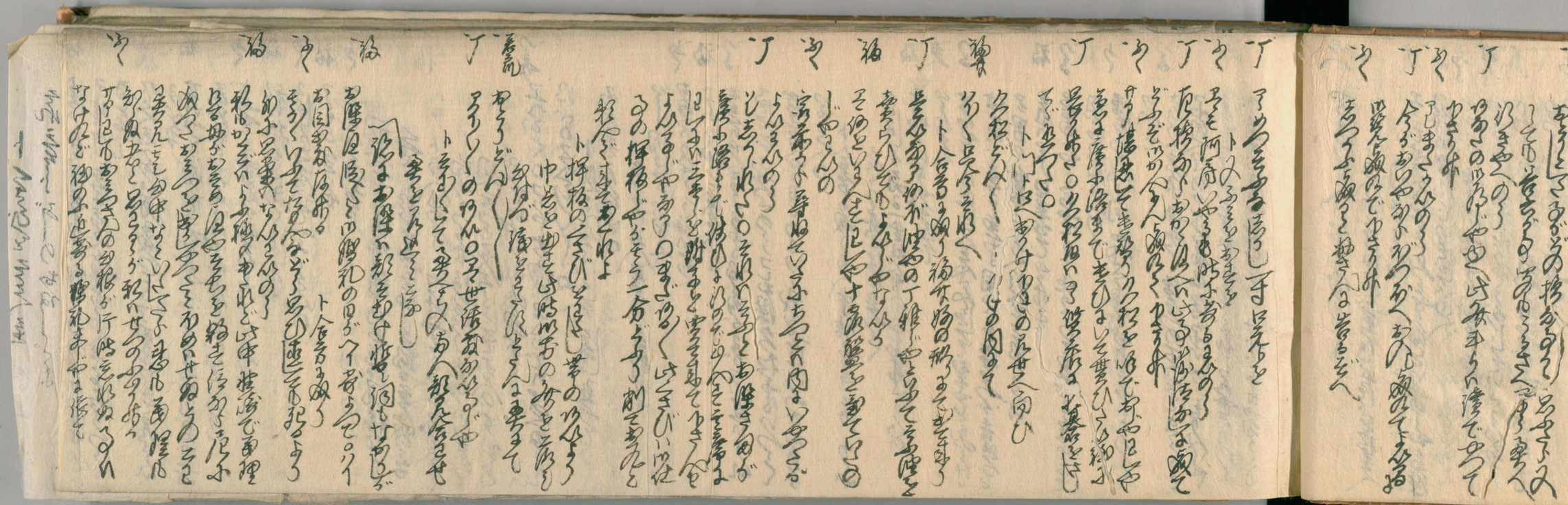
一 [illegible] 小国次
一 山家屋清蔵 市蔵
一 大橋屋[illegible] 霧蔵
一 丁雅久松 福助
一 油屋[illegible] 霧助
一 油屋娘お深 福太良
一 下女お百 房八
一 [illegible] 菓四良
一 [illegible] 米平
一 〃 千太良
一 〃 外次良
一 [illegible] 長四良
一 油屋[illegible] 菓次良
一 [illegible] 三津五良
一 下女 [illegible]
一 〃 鯉三良
一 丁雅丁長 きく松

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

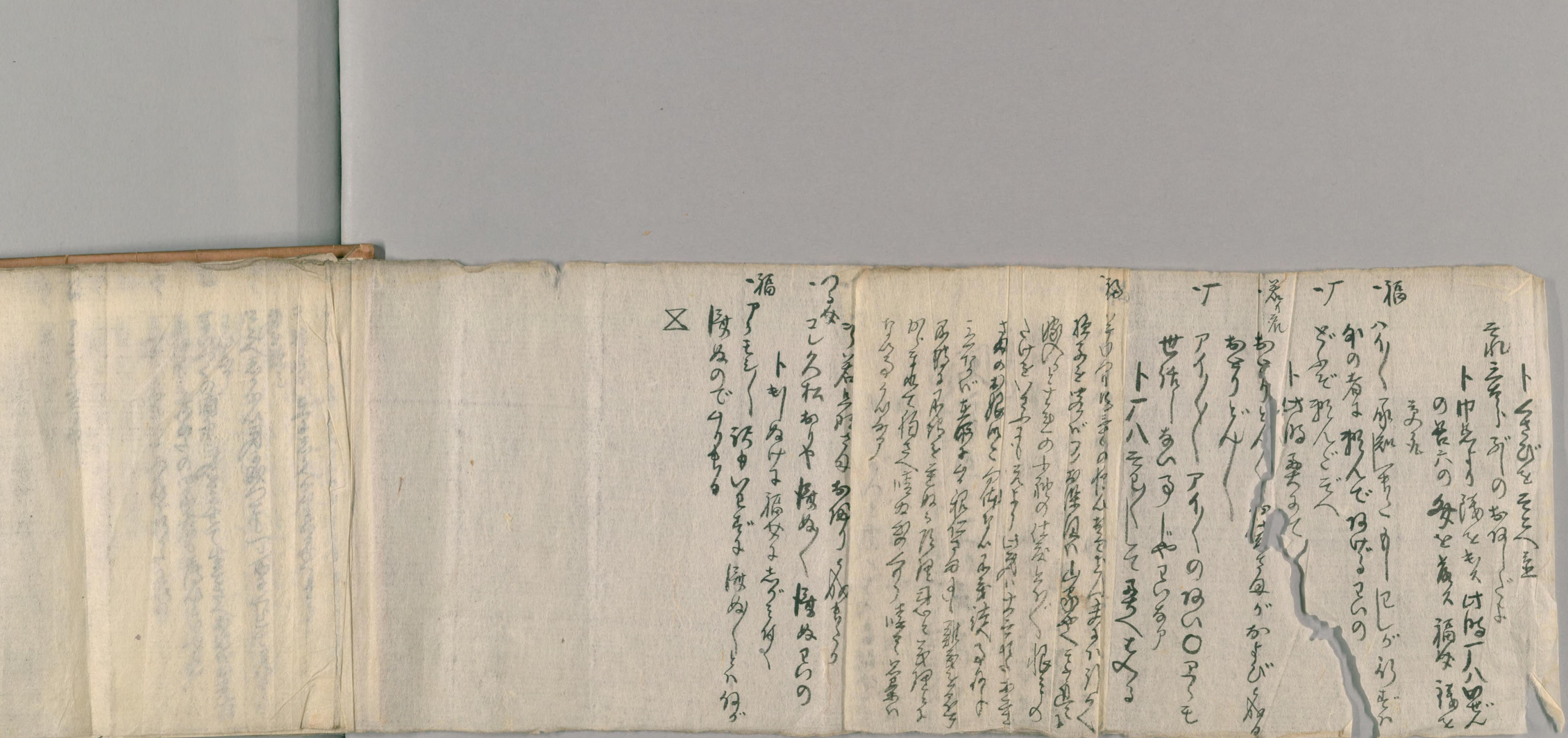
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

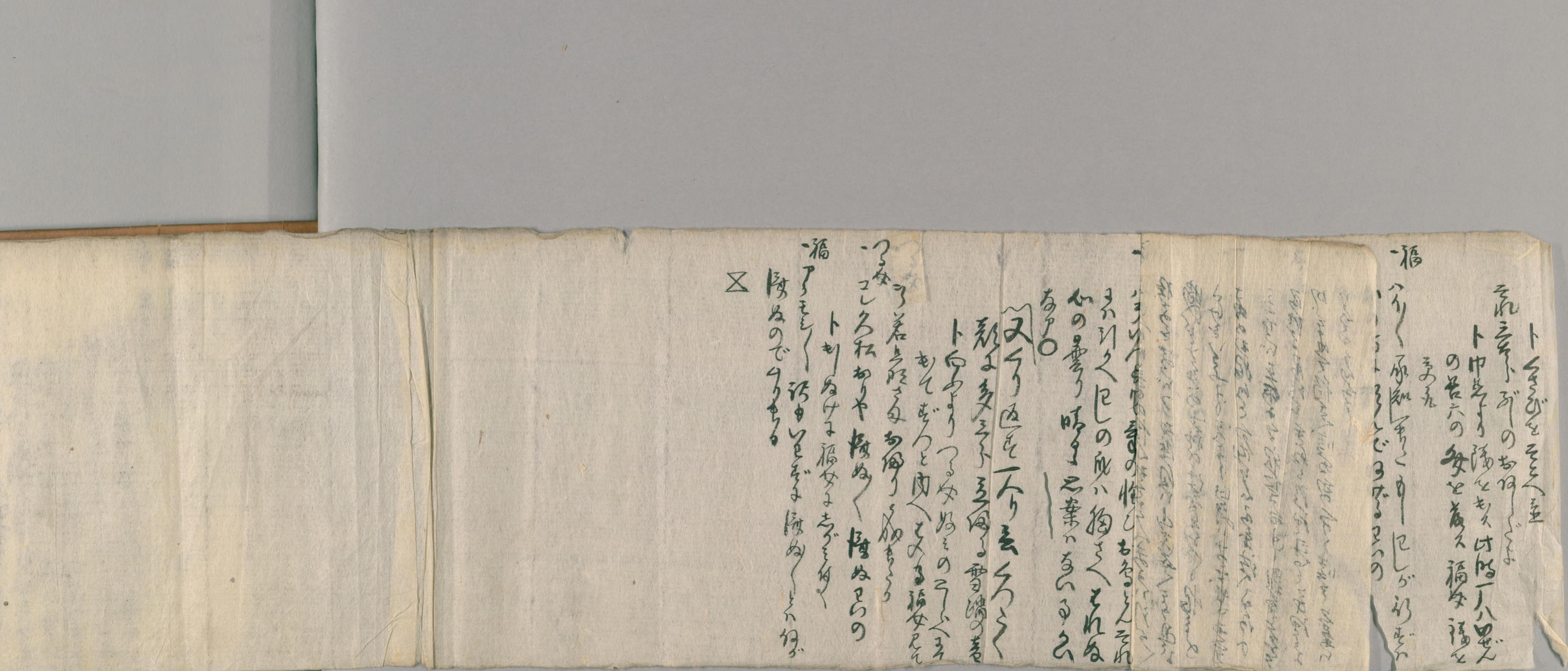






国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

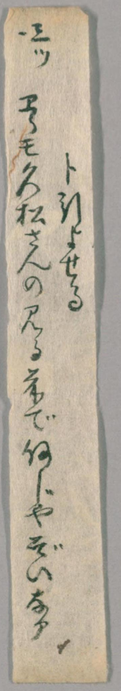




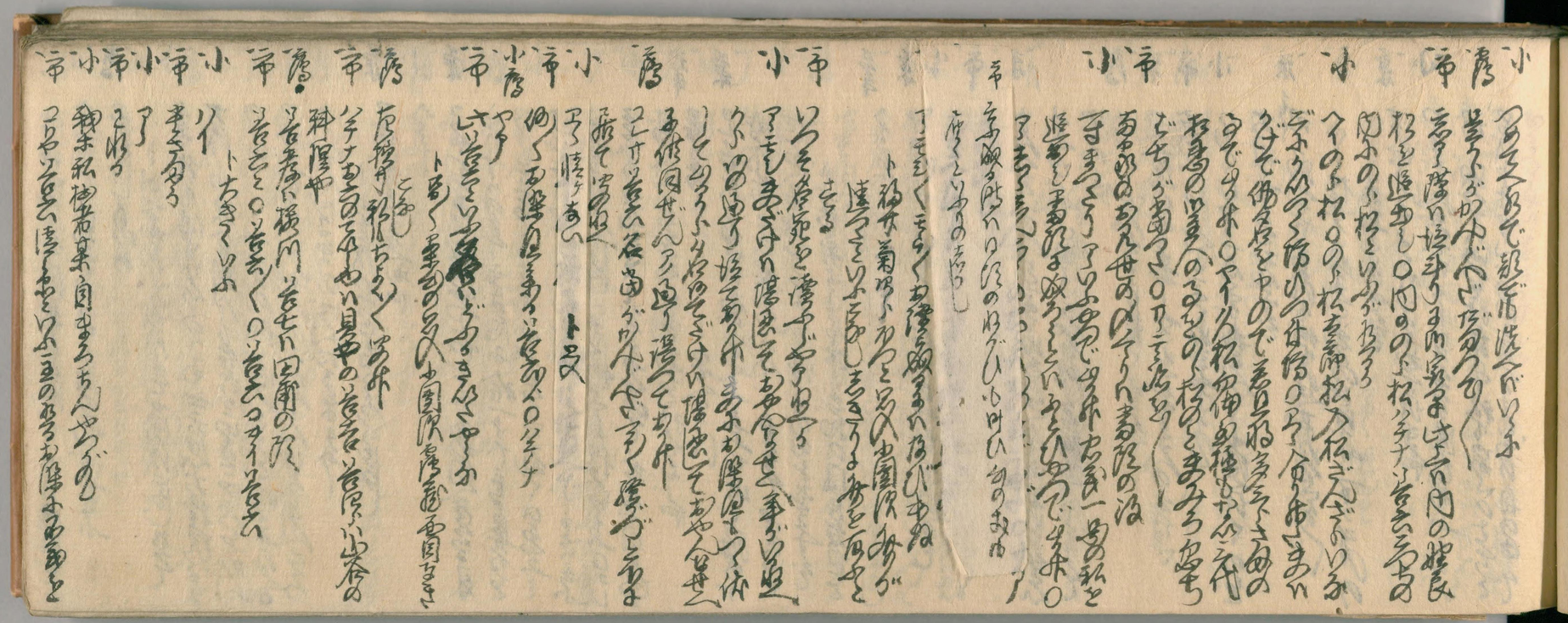
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2
ガラス使用　挟み込み物



国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

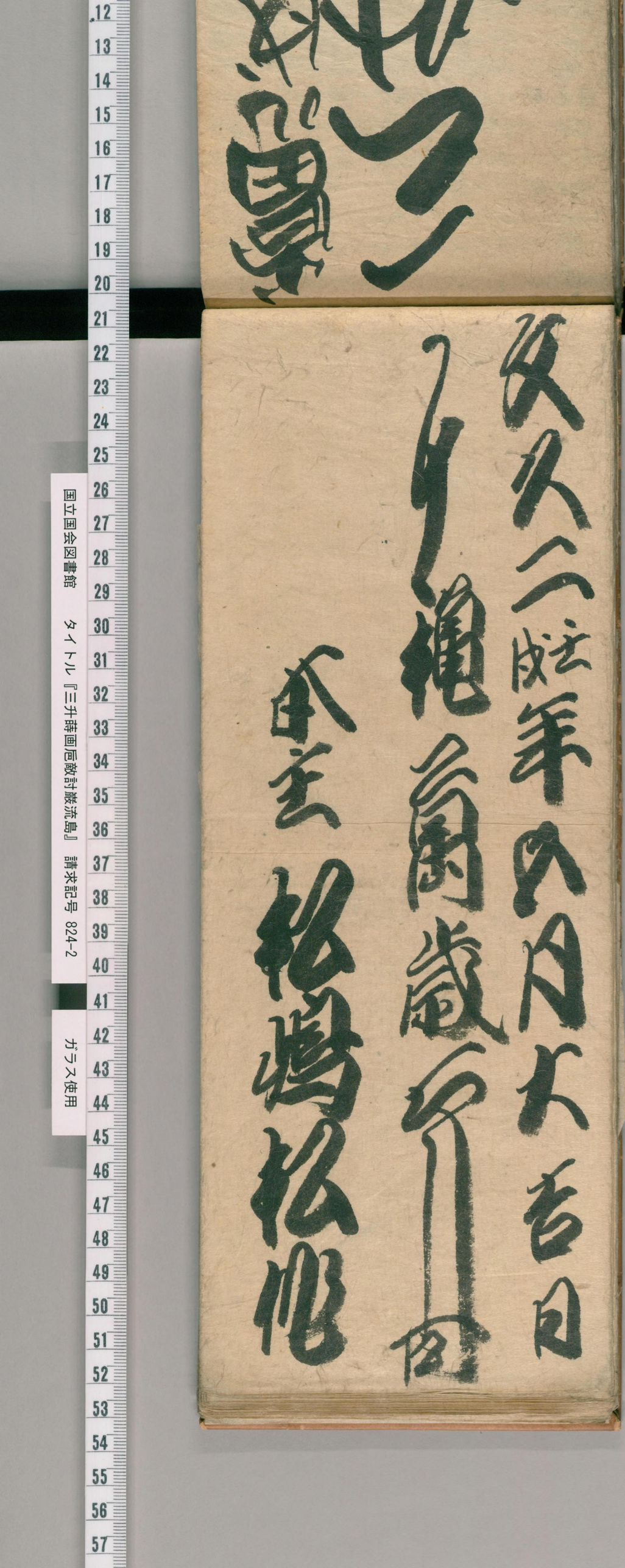
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

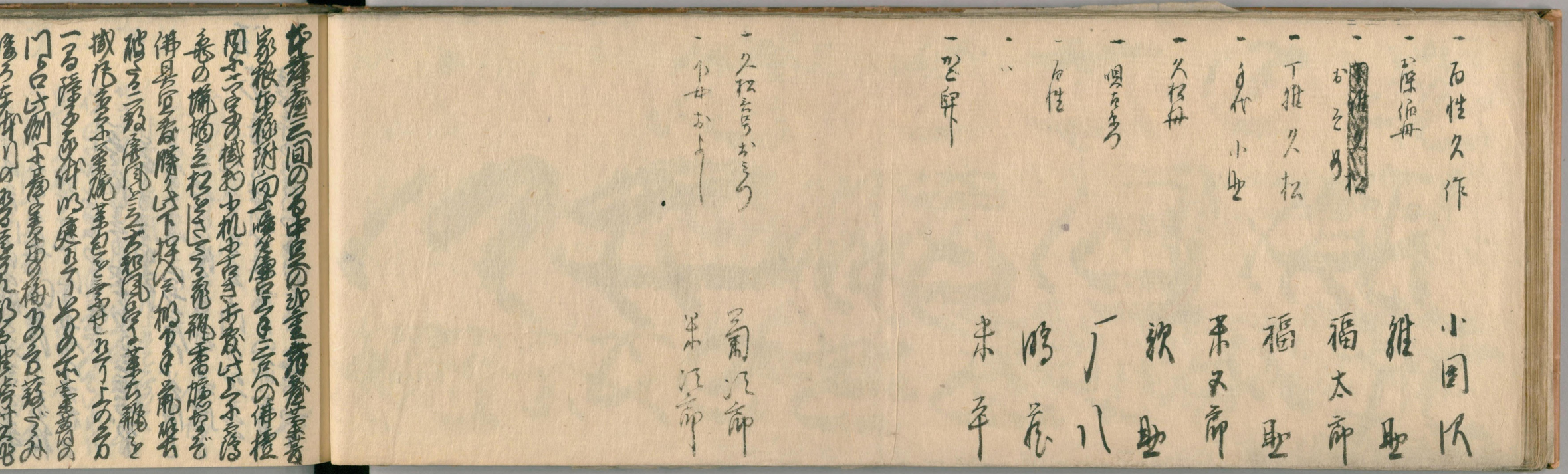
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

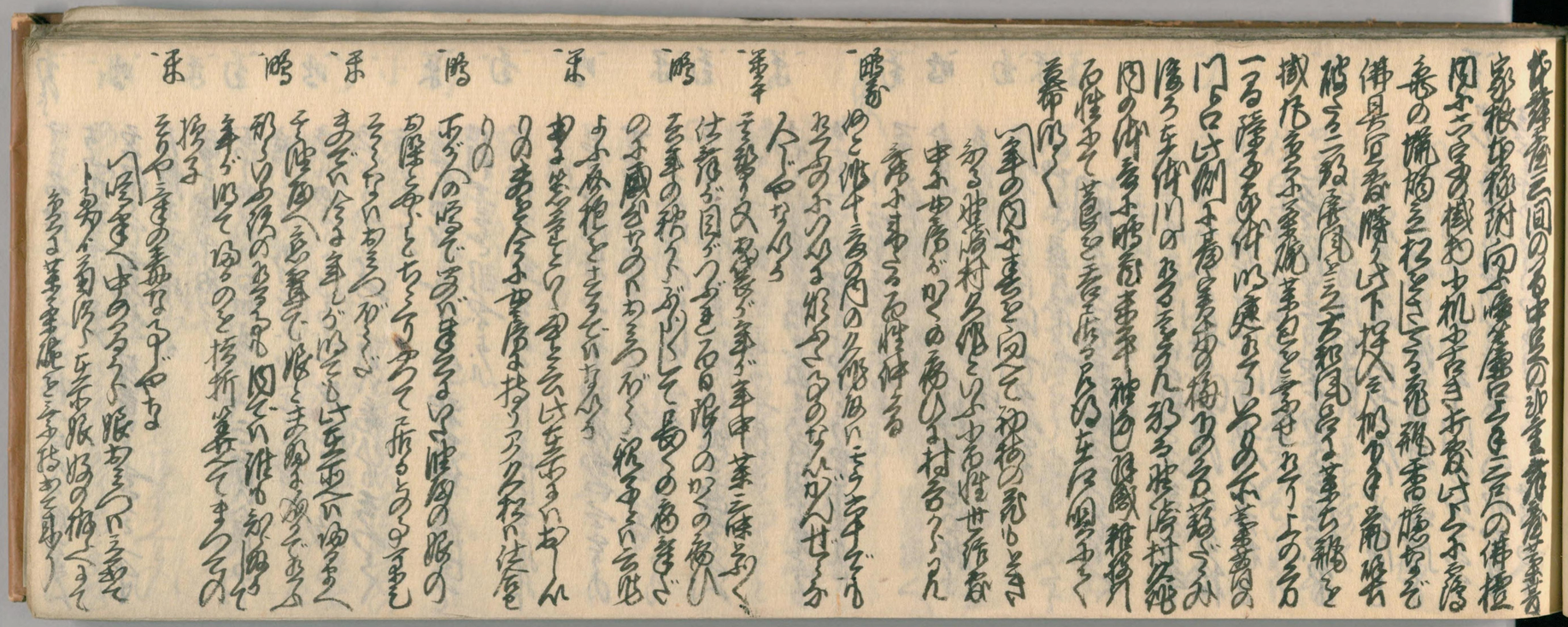
国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討厳流島』請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画尼敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

本朝産三万の間一面の山幕山あり[illegible]みて幕明く

ト若く見ゆ百性千ヶ寺年より或拾四案年りの

仕事あて

百性□ 本来今は後生を祈ひ出候ひにも成ずれ出ず姉ぬ

僧 ハイ左衛門でゐり候る事なり候ひ成ず姉を掛者は誠信

の西蒲原郡角三郷新田の者でゐるが言祖西

山井四案の吳場年りの者でゐり候が所ゆ成る

乞喰めが私の家自をさみ致し候

百性△ 四者でゐり候る三ウ法花はさの以信性でゐり候る

千ヶ寺 私は上総の西市吳の那合重村の者でゐり候が私

の家自を邪法の魔法のと門徒掛者ゑ者に惡

口申候る

百性 コリや四者ゑ

千ヶ寺 我家自の者ゆはる祖日蓮吉薩は本他上行

さるゝの以他身にて要名の別女の以姉男以初名を

菓王丸十三才にて法徳の道告を師とたのミ三

十二才にて初メて南無妙法蓮華と唱ひ申ひ

僧 あるゝ所あるも宇山親善上人は黒谷ゑせ銀石の

夜想に仍有月の情どのゝ息女を婦妻とあし

阿ごん花費法相天台浄土にて浄宮の教を

更弥陀本邪両方性せうたがひ申し

百性 南無阿ミだぶつ

千ヶ寺 我は逆に流るゝ法花の仍者の行る事に叶ひ

ぬとはゆゆ申し

百性 南妙あらわんげりよ

僧 様でも起ても立てもて居ても只一生に阿弥陀佛

とかなり

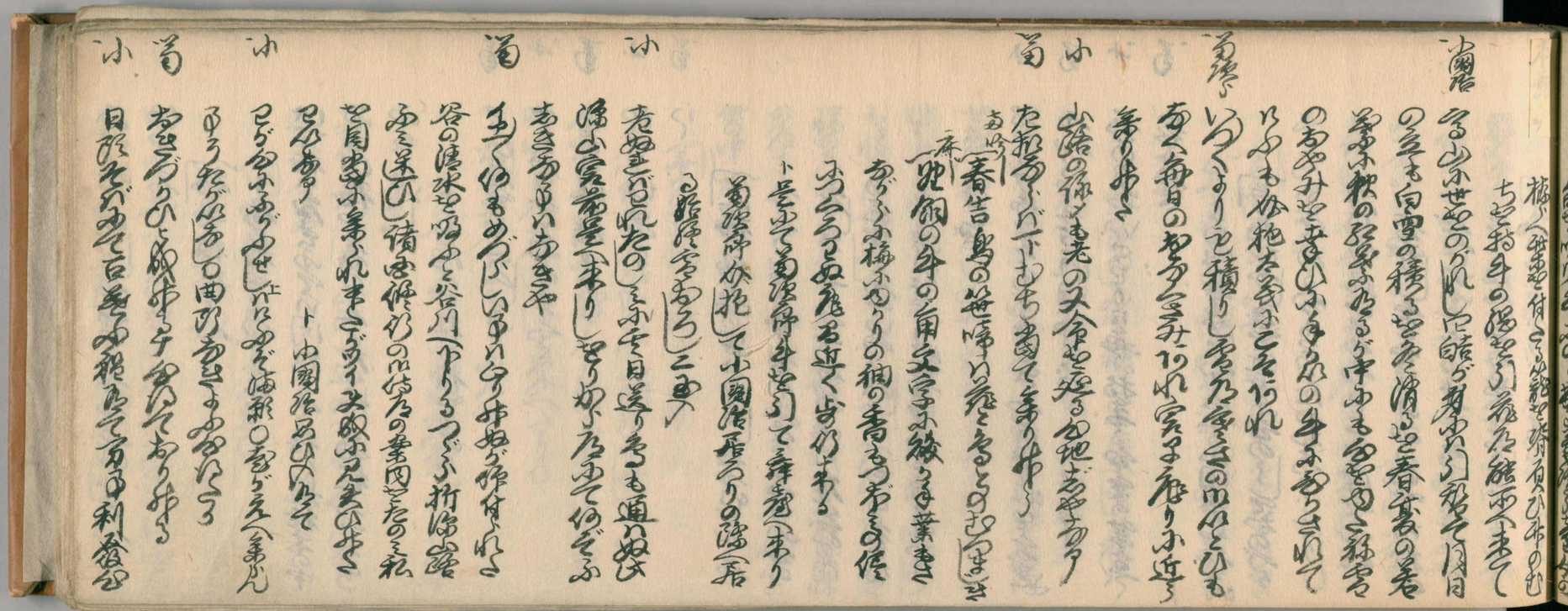
百性 南無阿ミだぶつ

千ヶ寺 四年六十一才にて弘安二年十月十三日池上左

衛門の銀に於て以鎌ぶる

百性 南無妙あらわんげりよ

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用



ト雪ふまゝの梢も白妙に咲とみるまで降
山路の白と白梅のいろは三字斗の白文
字ゆへ文字数曲りこゝるおゝ折
ト雪ふまゝ（ママ）後くの弁当てゝ面白ひて向ふ
の小園に美人の梅くゝるゝ後ゝ姿ゝ様
筒ゝ袖ゝ先斗ふのりあるゝ白妙ゝふゝまゝの

梅ゝ（ママ）雪ゝ付ゝゝも紙ゝを降有ゝひ斗のむ
ちゝ我斗の袖ゝうゝ後ゝ姿ゝ様ゝまて

小園

ゝる山水世ゝのゝゝしに暗ゝ月ゝ雪ゝうゝ花ゝて月日
のゝゝも白雪の積ゝるゝゝゝ消ゝゝゝ春ゝ来ゝの若
菜ゝ斗ゝ秋の紅葉ゝみゝるゝ中ゝゝも白ゝゝゝ雪ゝ
のゝゝみゝゝゝ

みけみて恨をば何せう方もなみだ[illegible]ハテ
何せう方
〔梅の下枝折とりて〕
ト梅の枝をとりて来て
此下枝は屋去にて同縁にて薗の魁祇本の中
にも此梅を薗のうへにたとへし拍板あてをちこち
みれまくべし
ト道行帰梅の枝をとりて
道 アノ此薗をうてうしにか
小 サア薗の参を物にまいらう
道 宮の目録の雅事を
小 加てりはさせよ
道 いて
〔はん〕梅は初薗の深き深山に薗なれば花とや
人の云ふ梅も梅ノ香匂ふ雪の春にふる雪の
庭にふれ世にて下野世帰の座敷の内
のお実が面ていつう姫しうつ云りの薗の縁
とて深ひ契りの妹背中薗とうるのおり
まじさ
小 思ひがけ方きそちがまことぞ宮の方ぬをしきと
道 本人の私がたのれ嗅おそろしくあれ
小 宮の月をいとうり日毎に拝まる宮の業をく
道 家り作さ
ト道行に業をとりてくべる小園浪太を接付
〔薗祇お方〕きを流水に宮のうしてなのづら
ふまきめる宮も思がたのあるうらぶり
月の仇来宣ゆ方きこそ浮世方れ
ト宮者うしきをうしみる同ゆ方市薗山
だけ大小宮殿巾箕をきて宮殿にて
来り薗名に立る月英宮者うしてまた成り
〔浮世敵れ深山に深山にみれ迷ひくる宮者本二〕
市薗
詳や思ひ出世は渕瀬と整る人の仇来れ又其に
敵れ本国を立去てが親類の苦の中にもいつぞ
や伯耆国山にて敵の伯耆る白倉が平暗にてまで
小一命を失ひぬきをうらぶも我女が情に命助
り備国を尚歴方きこの月の本懐に前後をおる
まるにあるさか
〔志だ〕ためらに折りに妹背の為を敵を討方さ
こうきをとびうに風情思をそれとれたことを

市蔵

誰やあひ御世は淵瀬と聲る人の仍来されて又大に
殺れ御国を立て玄て小鞍鞍の苦の雲中にもいふぞ
や倘前鬼山にて鉄の伯父なる白倉が斗略にてまで
に一命を失ふべきをたらぐぞも美女が情に命助
り倩國を扁歴あるこの身の本懐は前後をおす
まるはかさみ

〔志だ〕ためらに折らふに妹脊の乃を殺るなるに
こゝろをとびらに風情なるぞ見とれたることを
を打

ト雪あつ〕みて蔵乃岩角〔さ〕が祢の
殺る義羽あちこち蔵市蔵見て
いかなやまたりくされ武術に命を捨ぐね母の胎内
をあてか他の女といふ物は乳母なる者が外に志らぞ
此の事は妹脊の乃殺ると呼白倉が娘なれを〔雨〕
も情の乃命捨かまが貞蔵見ひ出さぐるを
情の乃にうときの乃理精斗が武にも行らぞ情
の乃もあるさに行らぞ武は命裏ういてんへ〔仮の
世の中〕をあア

〔三宮〕をかんじてたぐきめり

ト市蔵見ひ大乃て小國治〔こあ〕乃て
人来立て陽来武人アレ坂乃に雪中の雪
晴れ〕い人立〔来り〕と見へたり○

〔笠原谷乃〕たるらかみやり

ト庫の合方殺る小國治前〔あて蔵乃の方を
見る

夫殺る谷〔来り〕い山路に逆に者殺り位に此地の
裏民あるや

〔いかに姫こくこあるに逆ひ

ト市蔵舞を武をたるりにて

いらにも拵者は紀後の母の伯人子細乃て諸母扁
歴の武者御行は大雪に難義いさ〕乃事間に

小

市

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

おぐさ　ゆのまも　あやに　ゆゆしく　おもほゆ
小　山中
そさき　なこそ　ゆ　ゆ　ゆ

やとみりハテ無床しき所住居でゐるナ

「美人も無言をもためつ打係ゝ

沖　姫でまみしあことが相号通れ強健武勇天下に
輝く其骨柄たくましく程まで悔合あり通へ
てきゝ身をさしさん血筆の合わふつゝしみのへ

「武勇を志めぎ一言にこゝあくもきつと打なり

市　てにこつ華山のかく九天廣光として日角月角角
立て山鼓にふしあ富樹ゆりあ人あとうまかりあ人
ちう姫に此あさ取合ぬ美人の相号

沖　男は妻易人相もまつて通りいりまだいりる美人が
美に武術とてもかくのかくて身の極意志人の術
宣めのみてハ叶ふまじ

市　こハ思ひがけあきて何これ別命せば大云をたくに
仰れど本思を知て猜忌を人まさ方武術をため
見るに今日見うとに其人も来ぶ志に立物に志合
ぎ若し来ぶ其に立物ゆらぎ其にたよりて極意を
さる美人拙志が不存

沖　ハ通れ大丈夫粉拙しく此上に志ことにとゝぶき
ることをなり○

「拙しりに思し自去のつる獨無二ハが前に出し至
是をしられよ獨無だきりし此つる獨無を付あげたれ
る乃程母物でさらば得やこがれ人さの術とハ変
のまゝ此つる獨を取りに割べき術やあ

市　あんと

沖　いり程武術たんれん者を其事る術ハまもなら
志○コりや童女よ意へ来れ

蜀　ハり

ト蜀須ら前へ出て二方

沖　見られよ年ゆるゞり取る童女あれ其今目前
本此獨をたやすくつるべきを術をさづけ遠
くコりや童女の体かくめ教へ口傳

蜀　知ぬ事々

「其事に随ひ体のつる獨悟　童女は拳をかく
め打ちと見ゆるが急ぎに割て取ちつくり
ト蜀須郎目をとぢ種の内にていんを結ぶ薄
トロくに取り蜀須ら思ひ入れて拳を振りあ
げて獨を打仕ひ二ツにわれる市蘇乃を抱して

市　童女に仰合ぬ事伊のまの内

菊　旅人なる立像とおぼし

（ここに）あやしげ

ト剣さる鋤を市翁みせ付る

市　合点のゆかぬ立振舞也（しく）化生のくやまぬ体

いと怪の相（すま）文章作分御もみればみるまの像

おぼきてゐる

ト市翁思ひ入ありて前にある梅の枝をみて

てりや幸女アノ一枝を是へ折て

菊　呉ろおく

ト菊花神いぜんの梅を見て市翁指ゆく後

姿（見送り）有花梅の枝を折る

市　ヲヽ方此ト枝のいさぎよんで居るう

菊　春待問ひ梅のみの内より咲初て紅白の色もほ

ろ〳〵梅の花哉

市　ヲヽ是ハ〳〵（と）折り花退て（さ）也がら

さそくの土ひねくさき宮なさうと折るり

ト市翁梅を持てかくる多仮神ちやと

菊　花退小園治しんを結ぶ菊ト（ロ）にて

市翁自由ふさ折かれ処ぶて東さうと

実和ふる市方せう楽ふ（ふ）めことの（ふ）ふる

ゆくぞ楽ふもゆくぞ生利（途中ふて）老人たるか

合点ゆかぬそこを分るふ也ふ中ふてゆく事也

もゆかぬさうまさる市ハ（は）着ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）